銅　賞

「空気」

横須賀市立鴨居中学校三年　　市　川　はるの

「空気」って何だろう。例えば、何かの受験の時は合格したいという強い気持ちのせいで緊張し、会場に張りつめた空気が流れる。一方、家でお笑い番組を家族で観る時、おもしろいネタがあると家族が笑い、穏やかな空気が流れる。空気は常に人の感情によって変化している。空気は穏やかな時もあれば、時にはいじめを引き起こすような恐ろしいものでもある。私はあの時空気の恐ろしさを知った。

私が小学校四年生の時の話。当時は今とは別の所に住んでいた。四年生の四月、新学期を迎えた。担任もクラスメイトも三年生の時と全く一緒だった。私たちのクラスはとても仲が良く、昼休みはクラス全員で必ず校庭に出て、必ず全員で遊ぶ、という決まりがあった程、仲が良かった。この時は空気の恐ろしさをまだ知らなかった。

五月になった。私は部活に入部し、楽しい毎日を送っていた。その時、もう既にいじめは起きていた。最初は隣のクラスからだった。給食袋を取られた、消しゴムが盗まれたなど、ささいなものだった。

しかし、それは次第に大きくなり、悪口、暴力に発展した。ついにはそのクラスの担任の先生も学校へ来なくなってしまった。空気は恐ろしいもので、ついに私のクラスでもいじめは起きた。隣のクラスでいじめが起きたので、次第に私たちも悪い空気にのまれてしまったのだ。その空気に耐えられず、不登校になる子もクラスから出てきた。それだけ大きないじめなのに誰の口からも、

「これ、おかしくない。」

という言葉が出なかった。きっと、悪い空気に逆らえなかったのだと思う。私もそうだった。更にいじめは大きくなり、ついには私も巻きこまれてしまった。最初はほんのささいな事だった。しかし、いじめはどんどん激しくなった。ついには、

「死ね、消えて。」

と言われてしまった。私は初めてこの言葉を言われた。私はこの時、この何とも言えない悲しさを言葉で表せなかった。その言葉を、毎日のように言われ続けた。学校に行きたくないと初めて思った。

六月に入った。私はいつものように罵声を浴びせられていた。その時、

「ねえ、もうやめたら。」

一人の女子が私をいじめていた男子に言った。そして，

「あんな男子、相手にしなくていいんだからね。」

と、私に言ってくれた。その言葉を聞き、私はほっとした。

その日から私は、どんなに罵声を浴びせられても無視し、気にもしなくなった。すると、自然と周りに味方が増えた。そして、私を助けてくれるようになった。

七月、私は父の仕事の都合で転勤が決まった。友達にその事を話すと、

「行かないで。」

「さみしい。」

と言われた。私はその時、ほんの少し、さみしいな、と思った。

引っ越し当日。私は結局いじめられていた男子に何も言えず、今住んでいる所へ引っ越した。そして、新しい生活が始まった。後から聞いた話によると、その学校は荒れたままで、保護者会が何回も開かれる程大変だったらしい。悪い空気はそう簡単になくならなかったそうだ。

今、日本にはたくさんのいじめが存在する。そして、どのいじめも、

「みんながやってるから私も。」

「私もいじめないと、今度は私がターゲットにされる。」

という、悪い空気に逆らってはいけないという暗黙のルールがあるからいじめはあるのだと私は思う。そんな悪い空気を壊してほしいと私は願う。一言でいい、

「これ、おかしくない。」

この言葉を言うのにはとても勇気がいると思う。でも、言わない限り悪い空気は流れ続ける。

いじめには、悪い空気を壊すための勇気が必要だと思う。